

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじおG.O.G.

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 11 二〇二二年一月十四日

## 熊山橋を渡る——一九四八年一月十四日

小林章子（RSKアナウンサー）

伊藤正弘（RSKアナウンサー）

白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。

小林 さて、今日はどんなお話でしょうか。

白根 永瀬さんは、吉井川や熊山橋の辺りがお気に入り、詩や随筆にもたびたび登場します。今日は、永瀬さんの代表作のひとつ「熊山橋を渡る」を紹介します。この詩には、岡山で詩について語り合える仲間に出会い、自由に詩を書ける世の中になったことや、戦争が終わった喜びを、熊山橋から望む風景と天体に託しています。

熊山橋を渡る——一九四八年一月十四日

あたらしい熊山橋は

茫と白く宙にうかんである

空は星にあふれているが

西の天末にはまだ猫眼石いろの光が

フットライトのやうに

かなたの半球のあかるみを投げあげてある

そこに山々はくつきりとシルエツトになり

稜線のみで何をか語らうと波うつている。

そして空気には昼間のぬくみが

移り香のやうにただよつてある。

私は不思議な花道を辿るやうに

今この橋をわたって村へかへる

久しく一人でみた私は

等しく詩に執着する人々に今日逢つた。

年経てもなほ惹き合うその魅力の

あやまたぬ引力にみちびかれて。

絃のやうに張りきつて宙にうかんである橋よ

お前は私とみんなをつないであるな

私ははずむ指のおのきをおさへてここにさしかかる

あたらしく再び一人になるために

そして私を更に新らしく充分にみたすために。

西空のいろはもうふかいプルシャンプリュー

そこに一きは燃えたつやうに木星が輝き

その光ははるか河下の水面に映り  
そこで再び炬火のやうに燃えたつている。  
渡り終らうとして東の方をふりかへれば  
数知れぬ星のあふれ

「オリオン！」

私は心をこめてさう呼ぶ

この橋では星も仲間のよう思へる

星まぶれの熊山橋！

いま一九四八年に入つたばかり

鳴らうとする楽器のやうな新しい年よ

然しお前は何かよい魔力をそなへてあるな

その一ト触れで

忽ち私は去年逢わなかつた人々にもう逢つた。

過ぎる年押し流されたこの橋も

今ふたたび渡ることが出来た。

お前は力のあるものらしいな

複雑なものらしいな

熊山橋をわたり終つてそれを信ずる。

(『永瀬清子詩集』昭森社 一九六九年五月)

**伊藤** この詩は、熊山橋がテーマですけれども、何かと何かをつないでいる、たとえば日本と諸外国をつないで、その友好の架け橋と

なっているんじゃないかなと思いました。橋から見える星とかも仲間のよう思えるというところがありましたけれども、みんなが戦争が終わったらひとつだよと、仲間だよという、そんなメッセージがこめられているんじゃないかと思いました。

**白根** この詩から伊藤さんがそこまで読み取ってくださっているほどだと思います。この詩は、『美しい国』という詩集には入っていないんですけれども、この詩が書かれた頃に出版された『美しい国』という詩集は、まさにそういう思いで編まれた詩集です。

**小林** この詩は 一九四八年一月十四日 という日付がタイトルに添えられていることも興味深いですね。ちょうど季節は今頃ですが、一九四八年というのは、永瀬さんにとってどんな時代だったのでしょうか。

**白根** 永瀬さんは、戦争が終わった一九四五年十一月に現在の赤磐市松木の家に戻ってきました。翌年から農業にたずさわり、都会とは違う新しい生活の中で、様々な出会いと発見をし、まるで突然目が覚めたように詩を書いていた頃でした。

**小林** 一月十四日というのは、新しい年になって間もないですが、その間に「私は去年逢わなかつた人々にもう会った」とありますね。どんな人だったのか気になります。

**白根** 吉塚勤治さん、吉田研一さん、山本遣太郎さんら戦後の岡山文化を牽引していた方々と会ったのです。この詩を発表した『詩作』という詩の雑誌は、十四歳のなんば・みちこさんが書いた詩を載せているように戦後の岡山の詩を語るうえで欠かせない雑誌のひとつ

つです。そうした詩を書く仲間に出会ったとなると、うれしさはひとしおだったと思います。

その『詩作』の発行を祝う会の帰り道でこの詩は生まれました。あまり出かけることもなく孤独に暮らしていた永瀬さんは、詩を書く仲間との会合で励まされ、「橋がまるで私と友人たちをつなぐ花道のようにも思えた」そうです。そして一九四八年の新しい年を迎え、この年が「鳴ろうとする楽器のように『魔力をそなえた』頼もしいものにも思え」、戦争が終わった喜びを感じていたのです。

**小林** 永瀬さんがそんな想いを抱きながら渡ったという熊山橋、当時はどんな橋だったのでしょうか。

**白根** 永瀬さんが渡った熊山橋は、現在のような立派な橋ではなく、木製の板を打ち付けて作られた「曲がりくねった低い仮橋」で、架けても流されることが繰り返されていました。終戦後に何度も洪水で流された橋が、この時やっと架かったばかりでもあったことから、幾重にも喜ばしく嬉しかったことがうかがえます。

**小林** その嬉しい気持ちも、リズム感のある言葉の並びからも感じられます。

**白根** そうですね。永瀬さんは、自分の詩をアンソロジーに入れる時に書き直していることがあります。この「熊山橋を渡る」では、最初に発表した時には無かった終戦への思いを追加し、さらに書き直しています。一九七九年六月に永瀬さんの全集の位置づけで出版された『永瀬清子詩集』では、「戦争はやつともうすぎ去った。」。そして一九九〇年二月に出版した現代詩文庫の『永瀬清子詩集』で

は、「戦争はやつといま過去となり」としています。「もうすぎ去った。」となり、ついに「やつといま過去となり」と書くのに、昭和が終わる平成の世になりやつと終戦を実感していることがうかがえます。細かいところですが、こうした一語一語に永瀬さんの複雑な思いが表現されているのではないのでしょうか。

**伊藤** 永瀬さんの平和への思いと戦後にまだ心の癒えていない人もいるとか、そうした思いも配慮しての詩だったんですかね。

**白根** そうかもしれませんね。永瀬さんの平和への思いはこんなふうにもいろいろなところに表れていると思います。ところで、鳥取県佐治天文台名誉台長の香西洋樹先生は、この詩の副題「一九四八年一月十四日」に注目され、詩に書かれた頃の天体を星図で再現されています。「西空のいろはもうふかいプルシャンブリュー」とあるように夕闇が迫る頃、南西には三日月があり、その右上にあるのは金星です。金星は、宵の明星や明けの明星と呼ばれ、太陽から遠く離れることはありません。また、木星は西側に見えたり、太陽に近い時に金星と見間違えたりはしません。ですから香西先生から永瀬さんが「そこに一きは燃えたつやうに木星が輝き」と書いたのは、木星と金星を見間違えていたのだろうと教えていただきました。

**小林** 天文学ご専門の方ならではのご指摘ですね。

**白根** この詩で印象的なのは、冬の星座を代表するオリオン座の輝きです。永瀬さんは、「オリオン!」、「星まぶれの熊山橋!」と力強く星に呼びかけています。オリオンは、永瀬さんにとって「数知

れぬ星の中でも最も親しい」と考えている星座です。この詩を思いながら冬の星空を見ると、永瀬さんの思いを実感できるかもしれません。

赤磐市教育委員会熊山分室 二〇一八年三月

**小林** ところで、白根さんがお勤めの永瀬清子展示室で新しい企画展が始まったそうですね。それも、この作品にぴったりの一月十四日から始まったとうかがっております。

**白根** そうなんです。まさに一月十四日から永瀬清子展示室で「永瀬清子ゆかりの碑―岡山県編」という企画展を開いています。この展示では、岡山県内にある永瀬さんと交流や接点のあった人物や団体の碑を紹介しています。永瀬さんのふるさと・赤磐市にお越しただいた後は、県内各地にある碑を訪ねていただくことで、永瀬さんの交流と足跡、思いを感じていただけることを願っています。

永瀬さんゆかりの碑は、これから順次赤磐市ホームページの中にある永瀬清子展示室のページでも紹介していきます。お出かけでもご自宅でも楽しんでいただけるとうれしいです。

**小林** 今日もありがとうございました。

※記載されている情報は、二〇二二年一月十四日現在のものです。

〈参考文献〉

石田寛『熊山駅と熊山橋』熊山町 一九八八年十月

香西洋樹 講演「星座の娘・永瀬清子」『資料集―永瀬清子の詩の世界 第五集』